

生き方志向性の構造と生き方受容との関係

三 川 俊 樹

The Factor Structure of Life-orientation and its Relationship with Life-acceptance

Toshiki MIKAWA

要 約

組織労働者の働き方や生活スタイルが変化しつつある現在、「働きがい」を越えた「生きがい」を追求しようという働きが高まりを見せてきた。この「生きがい」は、限られた生活領域に限定してとらえるのではなく、さまざまな生活領域が相互に関連しあって構成された「生き方」との関係において検討することが必要であると考えられる。

本研究においては、生涯キャリア発達における個人の「生き方」を「将来の人生においてこのような生き方をしたい」という「生き方志向性」の視点から明らかにするために、尺度の開発とその検討を行った。また、「生きがい」については、生き方や人生に対する充実感・肯定的評価・有能感・達成感をその内容として、これを「生き方受容」と呼び、「生き方志向性」との関連を青年期から成人期の被験者を対象に検討した。

その結果、生き方志向性には、基本的に『自己成長志向』『社会的関係志向』『創造的変化志向』『生活安定志向』『職業的評価志向』の5側面があることが示された。また、社会人においては、「仕事」や「経済的安定性」に関する生き方志向性は生き方受容には関連せず、逆に「地域社会」「家庭生活」, 「他者援助」「社会的貢献」などの社会的関係や援助に関する生き方志向性が生き方受容と関連することが示された。このことから推論すれば、他者への関心の拡大や対人的援助への志向性が生き方受容に影響すると考えられ、やはり、「生きがい」は「働きがい」や「仕事のしがい」だけではなく、さらに多くの要素から構成されるものと考えねばならないことが示唆された。

キーワード：生き方, 生きがい, 生き方志向性, 生き方受容

1 問題と目的

(1) 組織労働者の「生きがい」と「生き方」

最近、大手企業の労働組合から組合員に向けて発信されるメッセージに『21世紀にふさわしい生きがい・働きがいを実感できる働き方』の追求（T労組）、「働く者の視点から本物の生きがいと働きがいを目指します」（M労組）などという表現が見られるようになり、「生きがい」をキー・コンセプトに盛り込んだ組合活動方針や施策が提案されている。組織労働者の働き方や生活スタイルが大きく変化しつつある現在、「安定した収入の得られる仕事を大切にしながらも、私生活には何を求めているのか」「仕事に働きがいを見出した上でのトータルな『生きがい』とは何か」など、「働きがい」を越えた「生きがい」を追求しようという動きが急速に高まりを見せている。

ところで、この「生きがい」とは何であろうか。小林（1993）は、『カウンセリング事典』（新曜社）において、「生きがい」を「生きる目的、生きる価値、生きる根拠、生きていてよかったという感じ、を統合したもの」と定義し、『『仕事が生きがいだ』というような単純なものではなく、多くの要素の複合体である』（「生きがい」の項）、「仕事だけとか、趣味だけとか、単一のもので成り立っているわけではなく、もっとたくさんの要素からできているのだと考えたい」（「生きがいの要素」の項）と説明している。

このようにみると、「生きがい」は「働きがい」や「仕事のしがい」「やりがい」だけではなく、さらに多くの要素から構成されるものと考えねばならない。すなわち、「生きがい」の問題は、仕事における「働きがい」、趣味やレジャーでの「遊びがい」、家庭生活での「育てがい」、地域社会活動での「尽くしがい」などのように、限られた生活領域に限定してとらえるのではなく、さまざまな生活領域が相互に関連しあって構成されたトータルな「生き方」との関係において検討することが必要であると考えられる。

(2) 成人発達論からみた「生き方」

成人期の「生き方」に関しては、1970年代後半にアメリカで発展した成人発達論が成人期以降の発達に注目し、成人期は平穏で安定した時期ではなく、自らのアイデンティティの再検討や自己変容を迫られる時期だとする見方を提案してきたが、成人期における発達は、主に2つの方向から検討されてきたと言える（三川、1996）。その一つは、成人発達を、個人の外的要因によって生活史的に説明しようとする立場であり、標準的（発達の）、特異的（偶発的）、歴史的（世代的）なライフ・イベントが個人の生活構造を変化させるという見方や、「年齢」のもつ影響力（年齢段階、年齢地位、年齢規範、社会的タイムテーブルなど）に注目した見方であった。もう一つは、「年齢」を指標としながら、ライフ・イベントなどの外的状況の違いを超えた内的要因、

すなわち「心理・社会的変化」の規則性や、その予測可能性に注目する見方であった。

成人期の自己変容のプロセスを明らかにし、中年期が危機に満ちているとする見方は、1970年代の後半に、Levinson, et al. (1978), Gould (1978), Sheehy (1976) らによって、綿密な面接と調査の資料から導き出されたものである。このうち、Levinson, et al. (1978) は、成人男性の面接調査から、成人期が絶え間のない自己変革を迫られる時期であることを示し、人生を「児童期と青年期」「成人前期」「中年期」「老年期」の4段階に区分して、ある発達段階から次の段階へと移行する過渡期 (transition) には、それまでの基本的な生活のパターン (生活構造) を修正して、新しく始まる生活構造の基盤を築くことが課題になるとした。また、Gould (1978) は、精神科医としての臨床的経験を基に質問紙調査を行い、それぞれの年齢段階において人生に対する考え方や関心事が共通していることを明らかにし、成人期の発達を、トランスフォーメーション (transformation: 変容) という言葉を用いて描写した。そして、各発達段階において、根強く残存する子ども意識 (child consciousness) と現実との間で生じる葛藤を解決し、その誤った信念から脱却して、より充実した成人意識を獲得することが成熟につながると思った。さらに、女性ジャーナリストの Sheehy (1976) は、18歳～55歳の男女の面接調査から、成人期の危機がほぼ同じ年齢に起こり、その内容が共通していることを示した。このうち、35歳から45歳までの10年間は「デッドラインの時代」、40歳代半ばからは「更新か放棄か」と表現され、この時期に人生の前半で形成されたアイデンティティの再検討を迫られる危機に直面するとした。

(3) キャリア発達の視点から見た成人期

成人期における自己変容や「中年期の危機」を指摘する成人発達論の一方では、成人期は安定した社会人・家庭人となる年代であり、それぞれの価値観に基づいたライフ・スタイルが築かれ、自信や充実感が最も高まる時期であるとする見方がある。キャリア・ガイダンスやキャリア・カウンセリングの基礎理論となるキャリア発達論もその一つであり、成人期の発達に独自の見方をとってきた。このうち、Super (1980) は、生涯キャリア発達の視点から、人生におけるさまざまな役割の多重性とその相互作用を役割特徴 (role salience) という概念でとらえ、その年齢的变化について検討してきた。

この概念に基づく国際比較研究 (WIS; Work Importance Study) において、中西・三川は、高校生から50歳代の男女を対象に、Superらが開発した特徴目録 (Salience Inventory) の日本語版を用いて、横断的な調査を行った (三川, 1990)。そのうち、主な役割活動に投入された時間やエネルギーを測定する「参加」尺度の年齢的变化を検討すると、男女とも20歳代から30歳代にかけて役割特徴の変化が最も著しかったが、40歳代以降は、役割特徴に大きな変化は認められなかった。中年期の40歳代では、男性では仕事に投入される時間やエネルギーのレベルが人生の中でピークとなるのに対して、女性では家庭や家族に関する活動がピークとなっていた。

また、安定したライフ・スタイルを築くためには、人生目標としての価値観がその方向を決定

すると考えられるが、この点について、中西・三川（1988）は、20歳代から50歳代の男性を対象に、Superらの開発した価値尺度（Values Scale）の日本語版を用いて、価値観の年齢的变化を検討した。その結果、20歳代から30歳代にかけて、価値観に著しい変化がみられることが示され、20歳代で重視される「能力の活用」「創造性」「ライフ・スタイル」「人間的成長」といった自己成長に関わる価値をはじめ、「危険性」や「多様性」「社会的関係」に関わる価値が30歳代では重視されなくなるのに対して、「経済的安定性」は重視されることが明らかになった。しかし、30歳代以降では大きな変化は見られず、安定した価値観が維持されていることが明らかにされた。

さらに、ライフ・スタイルが築き上げられた成人期には、自信や充実感が高まるかどうかという点について、三川（1990）は、役割受容（role-acceptance）という概念を用いて、人生における役割への満足感や自己評価、役割の達成感や有能感の年齢的变化を質問紙法によって横断的に調査した。その結果、男性では40歳代の役割受容が最も高く、人生のピークを示すのに対して、50歳代ではやや低下することが示された。女性においては青年期から中年期にかけて、ほぼ一貫して役割受容が高まることが明らかにされた。

以上の結果からみると、20歳代から30歳代にかけての時期が青年期から成人期への過渡期であり、価値観の変化に伴って役割特徴が変化し、ライフ・スタイルが大きく変化していることがわかる。しかし、30歳代には安定した価値観が形成され、40歳代にかけては、男性では仕事を中心にしたライフ・スタイルが確立され、女性では家庭や家族に関わる活動を中心にした生活構造が形成されると考えられる。すなわち、40歳代からの成人期は確立されたライフ・スタイルが維持され、自分の生き方や役割に対する自信や充実感が最も高い、安定した時期であると考えられる（三川，1991）。

（4）価値観と生き方・生きがい——「生き方志向性」「生き方受容」という概念

生涯にわたるキャリア発達の視点から個人の生き方の問題を考えるとき、個人の価値観と人生における役割との関連に注目する必要がある。個人の生き方は、ある特定の価値観によって規定されるのではなく、多様化した価値観とその表現としての役割活動が相互に関連しながら構成されるという視点に立ち、WISでは、価値（value）および役割特徴（role salience）の接点として価値期待（value expectations）という概念を設定し、さまざまな価値をそれぞれの役割において実現する機会があるかどうかを検討してきた。

本研究においては、生涯キャリア発達における個人の「生き方」を明らかにするために、価値観の表現としての活動の一つの「生き方」として捉え、「将来の人生においてそのような生き方をしたい」（「生き方志向性」）という視点から、さまざまな「生き方志向性」の相互関連とその構造を明らかにするために、尺度の開発とその検討を行いたい。また、「生きがい」については、生き方や人生に対する充実感や肯定的評価、有能感や達成感をその暫定的な内容として、これを

「生き方受容」と呼び、「生き方志向性」との関連を青年期から成人期にかけての被験者を対象に検討する。

2 方 法

(1) 生き方志向性尺度・生き方受容尺度の作成と構成

「生き方志向性」を測定するために、Values Scaleの翻訳版(中西・三川, 1988)を中心に、「新価値観尺度」(三川・井上・芳田, 1993)を参考にして、価値観を25領域に設定し、それぞれの価値観が反映された活動を表現した項目を考案した(25下位尺度:各3項目)。教示では、これらの活動を一つの「生き方」とし、これから先の人生においてこのような「生き方」をしたいと思う程度を、「ぜひそうしたいと思う」～「ほとんどそうしたいと思わない」までの6段階で評定を求めた。下位尺度と項目内容については、付表1に示した。

「生き方受容」の測定には、「役割受容尺度」(三川, 1988, 1991)を参考に、生き方や人生に対する充実感・肯定的評価・有能感・達成感の4側面を設定し、各尺度とも10項目を考案した。この尺度は、各項目が自分自身にあてはまるかどうかを、「とてもよくあてはまる」～「ほとんどあてはまらない」までの5段階で評定を求めた。下位尺度と項目内容については、付表2に示した。

(2) 調査対象・調査時期

「生き方志向性尺度」「生き方受容尺度」を1998年6月に大学生および社会人を対象に実施し、大学生の男性71名・女性125名、社会人の男性295名・女性138名の有効回答を得た。なお、社会人の年齢構成は、20歳代では男性74名・女性101名、30歳代では男性145名・女性31名、40歳代では男性70名・女性4名、50歳代では男性6名・女性2名となっていた。

3 結 果 と 考 察

(1) 各尺度の信頼性(内的整合性)の検討

各尺度の信頼性については、大学生および社会人のデータを用いて、下位尺度ごとに内的整合性(α 係数)を検討し、その結果を表1に示した。

まず、「生き方志向性尺度」については、25の下位尺度ごとに3項目の得点を加算した尺度得点を求めて α 係数を算出したところ、「4. 他者援助」で.60、「3. 責任性」で.65とやや低い値を示したが、その他の尺度では、.72～.90という値を示しており、項目数が3項目であることを考慮すれば、内的整合性は満足できるものといえる。

また、「生き方受容尺度」に関しては、各下位尺度とも、 α 係数は.80～.89と十分に高かった。

(2) 生き方志向性および生き方受容の性差

大学生および社会人のデータをもとに、男女別に各尺度の平均と標準偏差を求め、その性差を検討するために、2群間の平均の差の検定(t検定)を行なった(表2)。

その結果、大学生においては、生き方志向性の「6. 権威」(p<.01)と「11. 身体的活動」(p<.05)では男性の平均が有意に高かったが、「10. 人間的成長」(p<.01)では女性の平均が有意に高かった。なお、生き方受容に関しては、有意差はまったくみられなかった。

社会人においては、生き方志向性の「6. 権威」「7. 自律性」「8. 創造性」「11. 身体的活動」「23. 地域社会」(p<.001)で男性の平均が有意に高かったほか、「1. 能力の活用」「13. 危険性」「22. 仕事」(p<.01)、「2. 達成」「12. 社会的評価」(p<.05)でも、男性の平均が有意に高かった。なお、生き方受容に関しては、すべての尺度で男性の平均が有意に高く、とくに「4. 達成感」(p<.001)では最も大きな性差が認められた。

表1 生き方志向性尺度と生き方受容尺度の内的整合性

下位尺度	α 係数
生き方志向性	
1 能力の活用	.86
2 達成	.85
3 責任性	.65
4 他者援助	.60
5 社会的貢献	.84
6 権威	.78
7 自律性	.78
8 創造性	.88
9 ライフ・スタイル	.73
10 人間的成長	.81
11 身体的活動	.75
12 社会的評価	.88
13 危険性	.77
14 多様性	.72
15 人間関係	.73
16 経済的安定性	.80
17 健康	.77
18 ゆとり	.77
19 宗教	.84
20 老後	.90
21 学習	.87
22 仕事	.83
23 地域社会	.81
24 趣味やレジャー	.79
25 家庭生活	.83
生き方受容	
1 充実感	.89
2 肯定的評価	.83
3 有能感	.85
4 達成感	.80

(3) 生き方志向性および生き方受容の年代差

大学生と社会人の年代差を検討するために、男女別に2群間の検定(t検定)によって年代差を比較した結果が表3である。

男性においては、「1. 能力の活用」「2. 達成」「3. 責任性」「7. 自律性」「9. ライフ・スタイル」「10. 人間的成長」に加えて「21. 学習」「22. 仕事」が社会人において有意に低かったほか、「13. 危険性」「14. 多様性」「15. 人間関係」でも、社会人の平均が有意に低かった。これとは逆に、「6. 権威」「20. 老後」「25. 家庭生活」では、社会人の平均が有意に高いことが示された。また、生き方受容に関しては、「2. 肯定的評価」で社会人の平均が有意に高いことが示された。

女性においても、「1. 能力の活用」「2. 達成」「3. 責任性」「7. 自律性」「8. 創造性」「9. ライフ・スタイル」「10. 人間的成長」と「21. 学習」「22. 仕事」が、社会人において有

三川：生き方志向性の構造と生き方受容との関係

表2 生き方志向性および生き方受容の性差

	大 学 生		社 会 人	
	男性 (n= 71) 平均 (SD)	女性 (n= 125) 平均 (SD)	男性 (n= 295) 平均 (SD)	女性 (n= 138) 平均 (SD)
1 能力の活用	16.59 (1.74)	16.31 (2.10)	15.00 (2.58)	>> 14.28 (2.51)
2 達成	15.97 (1.86)	15.74 (2.25)	14.54 (2.73)	> 13.98 (2.52)
3 責任性	16.06 (1.91)	15.84 (1.77)	15.10 (2.01)	14.69 (2.07)
4 他者援助	13.80 (3.59)	13.94 (3.05)	13.57 (2.39)	13.78 (2.49)
5 社会的貢献	12.11 (3.95)	11.74 (3.51)	12.12 (2.77)	11.77 (2.71)
6 権威	12.06 (3.18)	>> 10.63 (2.85)	13.21 (2.90)	>>> 10.65 (2.66)
7 自律性	15.32 (2.54)	14.81 (2.20)	14.03 (2.57)	>>> 12.58 (2.54)
8 創造性	14.79 (3.05)	14.04 (3.37)	14.03 (2.91)	>>> 12.94 (2.80)
9 ライフ・スタイル	15.21 (1.98)	15.41 (2.14)	14.38 (2.41)	14.04 (2.29)
10 人間的成長	16.78 (1.75)	<< 17.41 (1.28)	15.73 (2.37)	15.99 (2.17)
11 身体的活動	12.49 (3.15)	> 11.25 (3.76)	13.25 (2.65)	>>> 12.01 (2.84)
12 社会的評価	13.39 (3.63)	12.56 (3.34)	12.75 (3.41)	> 11.92 (2.98)
13 危険性	13.49 (3.42)	13.24 (3.26)	12.33 (2.79)	>> 11.57 (2.91)
14 多様性	14.59 (3.03)	14.46 (3.17)	12.85 (2.69)	12.52 (2.85)
15 人間関係	14.58 (2.87)	14.34 (3.06)	13.71 (2.45)	13.80 (2.58)
16 経済的安定性	14.73 (2.54)	14.58 (2.79)	15.17 (2.44)	14.99 (2.34)
17 健康	14.38 (2.51)	14.70 (2.46)	14.77 (2.34)	15.14 (2.33)
18 ゆとり	15.87 (2.09)	16.26 (1.99)	15.44 (2.10)	15.72 (2.17)
19 宗教	5.96 (3.36)	5.10 (2.63)	6.22 (3.37)	5.76 (3.02)
20 老後	10.79 (3.17)	10.90 (3.56)	12.15 (3.35)	11.65 (3.40)
21 学習	15.59 (2.28)	15.86 (2.16)	13.82 (3.01)	14.15 (2.60)
22 仕事	10.04 (3.42)	9.26 (3.18)	8.42 (3.22)	>> 7.52 (2.44)
23 地域社会	10.56 (3.06)	10.00 (3.05)	10.58 (2.80)	>>> 9.49 (2.65)
24 趣味やレジャー	14.86 (2.71)	15.18 (2.54)	14.40 (2.37)	14.39 (2.43)
25 家庭生活	14.63 (3.00)	14.59 (2.78)	15.51 (2.31)	15.17 (2.48)
1 充実感	29.93 (6.76)	28.75 (7.08)	30.52 (6.84)	>> 28.39 (5.64)
2 肯定的評価	32.94 (6.21)	32.67 (6.34)	35.06 (6.06)	>> 33.51 (5.05)
3 有能感	33.23 (6.78)	31.81 (6.59)	34.41 (6.08)	>> 32.74 (5.59)
4 達成感	30.76 (5.96)	30.01 (6.14)	31.74 (5.45)	>>> 29.28 (4.54)

<; p< .05, <<; p< .01, <<<; p< .001

意に低かったほか、「13. 危険性」「14. 多様性」でも、社会人の平均が有意に低かった。さらに、「18. ゆとり」と「24. 趣味やレジャー」についても、社会人の平均が有意に低いことが示された。なお、女性の場合には、生き方受容に関しては、有意な年代差は認められなかった。

(4) 生き方志向性の基本的構造

まず、大学生のデータを用いて、生き方志向性の基本的構造を検討し、各群ごとの生き方志向性の構造を比較するための基準を設定することにした。そこで、大学生の男女とも71名ずつ計142名のデータを用いて、「生き方志向性尺度」の25下位尺度の相関行列に因子分析(主成分法)を適用したところ、第5因子と第6因子の間で固有値の大幅な減少が認められたので、この5因子解でvarimax回転を行った(表4)。

この5因子は、それぞれ次のように解釈することができる。まず、第1因子は、「3. 責任性」

表3 生き方志向性および生き方受容の年代差

	男 性		女 性	
	大学生 (n=71) 平均 (SD)	社会人 (n=295) 平均 (SD)	大学生 (n=125) 平均 (SD)	社会人 (n=138) 平均 (SD)
1 能力の活用	16.59 (1.74)	>>> 15.00 (2.58)	16.31 (2.10)	>>> 14.28 (2.51)
2 達成	15.97 (1.86)	>>> 14.54 (2.73)	15.74 (2.25)	>>> 13.98 (2.52)
3 責任性	16.06 (1.91)	>>> 15.10 (2.01)	15.84 (1.77)	>>> 14.69 (2.07)
4 他者援助	13.80 (3.59)	13.57 (2.39)	13.94 (3.05)	13.78 (2.49)
5 社会的貢献	12.11 (3.95)	12.12 (2.77)	11.74 (3.51)	11.77 (2.71)
6 権威	12.06 (3.18)	<< 13.21 (2.90)	10.63 (2.85)	10.65 (2.66)
7 自律性	15.32 (2.54)	>>> 14.03 (2.57)	14.81 (2.20)	>>> 12.58 (2.54)
8 創造性	14.79 (3.05)	14.03 (2.91)	14.04 (3.37)	>> 12.94 (2.80)
9 ライフ・スタイル	15.21 (1.98)	>> 14.38 (2.41)	15.41 (2.14)	>>> 14.04 (2.29)
10 人間的成長	16.78 (1.75)	>>> 15.73 (2.37)	17.41 (1.28)	>>> 15.99 (2.17)
11 身体的活動	12.49 (3.15)	13.25 (2.65)	11.25 (3.76)	12.01 (2.84)
12 社会的評価	13.39 (3.63)	12.75 (3.41)	12.56 (3.34)	11.92 (2.98)
13 危険性	13.49 (3.42)	>> 12.33 (2.79)	13.24 (3.26)	>>> 11.57 (2.91)
14 多様性	14.59 (3.03)	>>> 12.85 (2.69)	14.46 (3.17)	>>> 12.52 (2.85)
15 人間関係	14.58 (2.87)	> 13.71 (2.45)	14.34 (3.06)	13.80 (2.58)
16 経済的安定性	14.73 (2.54)	15.17 (2.44)	14.58 (2.79)	14.99 (2.34)
17 健康	14.38 (2.51)	14.77 (2.34)	14.70 (2.46)	15.14 (2.33)
18 ゆとり	15.87 (2.09)	15.44 (2.10)	16.26 (1.99)	> 15.72 (2.17)
19 宗教	5.96 (3.36)	6.22 (3.37)	5.10 (2.63)	5.76 (3.02)
20 老後	10.79 (3.17)	<< 12.15 (3.35)	10.90 (3.56)	11.65 (3.40)
21 学習	15.59 (2.28)	>>> 13.82 (3.01)	15.86 (2.16)	>>> 14.15 (2.60)
22 仕事	10.04 (3.42)	>>> 8.42 (3.22)	9.26 (3.18)	>>> 7.52 (2.44)
23 地域社会	10.56 (3.06)	10.58 (2.80)	10.00 (3.05)	9.49 (2.65)
24 趣味やレジャー	14.86 (2.71)	14.40 (2.37)	15.18 (2.54)	> 14.39 (2.43)
25 家庭生活	14.63 (3.00)	<< 15.51 (2.31)	14.59 (2.78)	15.17 (2.48)
1 充実感	29.93 (6.76)	30.52 (6.84)	28.75 (7.08)	28.39 (5.64)
2 肯定的評価	32.94 (6.21)	<< 35.06 (6.06)	32.67 (6.34)	33.51 (5.05)
3 有能感	33.23 (6.78)	34.41 (6.08)	31.81 (6.59)	32.74 (5.59)
4 達成感	30.76 (5.96)	31.74 (5.45)	30.01 (6.14)	29.28 (4.54)

<; p< .05, <<; p< .01, <<<; p< .001

「7. 自律性」「9. ライフ・スタイル」「10. 人間的成長」および「21. 学習」を中心としているので、『自己成長志向』と解釈することができる。第2因子は、「5. 社会的貢献」「4. 他者援助」に「23. 地域社会」が高く負荷し、これに「19. 宗教」「25. 家庭生活」「25. 人間関係」が加わって構成される『社会的関係志向』と解釈することができる。第3因子は、「13. 危険性」「14. 多様性」と「24. 趣味やレジャー」や「8. 創造性」によって構成される『創造的変化志向』と解釈できる。第4因子は、「18. ゆとり」「17. 健康」に「16. 経済的安定性」「20. 老後」のほか、ここにも「25. 家庭生活」が加わった構成の『生活安定志向』と解釈することができる。第5因子は、「12. 社会的評価」「6. 権威」「1. 能力の活用」に「22. 仕事」が加わって構成される『職業的評価志向』と解釈することができる。

このように、生き方志向性の構造を検討すると、Super (1980) の提案した主要な5つの役割活動(学習, 仕事, 地域社会, 家庭や家族, 趣味やレジャー)への生き方志向性が、それぞれの

三川：生き方志向性の構造と生き方受容との関係

表4 「生き方志向性」の基本的構造（大学生男女，n=142）

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h ²
1 能力の活用	.44	-.11	-.38	-.02	.48	.53
2 達成	.65	-.25	-.28	.09	.37	.71
3 責任性	.80	-.13	-.09	-.07	.02	.67
4 他者援助	.37	-.77	-.05	.05	.07	.74
5 社会的貢献	.22	-.83	.06	.08	.21	.79
6 権威	.29	-.35	-.06	.20	.68	.71
7 自律性	.75	.01	-.24	.15	.12	.65
8 創造性	.44	-.19	-.64	-.06	.27	.71
9 ライフ・スタイル	.68	-.07	-.22	.34	.13	.65
10 人間的成長	.68	-.11	-.06	.34	.10	.61
11 身体的活動	.22	-.37	-.40	.10	-.08	.36
12 社会的評価	.10	-.04	-.18	.38	.74	.74
13 危険性	.28	-.11	-.80	-.12	.19	.78
14 多様性	.30	-.11	-.79	-.15	.14	.77
15 人間関係	.18	-.50	-.45	.27	.20	.60
16 経済的安定性	.03	.21	-.00	.67	.34	.60
17 健康	.32	-.22	-.05	.71	-.07	.66
18 ゆとり	.27	.06	-.04	.76	.13	.67
19 宗教	.09	-.53	.06	-.14	.26	.38
20 老後	-.04	-.31	.11	.63	-.11	.51
21 学習	.61	-.19	-.28	.05	-.04	.48
22 仕事	-.01	-.21	-.20	-.26	.64	.56
23 地域社会	-.13	-.75	-.35	.13	.11	.74
24 趣味やレジャー	.07	.10	-.74	.24	-.07	.62
25 家庭生活	-.00	-.52	-.28	.49	-.23	.64
寄与率 (%)	16.20	13.42	13.19	11.63	9.35	63.79

因子に寄与している点が注目される。

(5) 生き方志向性の構造と生き方受容との関連

大学生および社会人の男女別に、生き方志向性の因子構造を検討し、さらに生き方受容との関連を検討することにした。なお、生き方志向性の構造の検討には、各群ごとに「生き方志向性尺度」の25下位尺度の相関行列に因子分析（主成分法）を適用し、5因子を抽出した。さらに、「生き方志向性尺度」と「生き方受容尺度」の各下位尺度の相関係数を求めて併せて示した。

まず、大学生男子の結果（表5-1）について検討する。生き方志向性の構造に関しては、先に解釈した『自己成長志向』『社会的関係志向』『生活安定志向』『職業的評価志向』『創造的変化志向』の5因子からなる基本的構造が確認できる。また、生き方志向性と生き方受容との関連については、『自己成長志向』に比較的高い負荷を示した「2. 達成」「3. 責任性」「10. 人間的成長」「21. 学習」が、それぞれ生き方受容尺度の複数の下位尺度にわたって有意な正の相関を

表5-1 「生き方志向性」の構造と「生き方受容」との関連(大学生男子, n=71)

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h ²	充実感	肯定的評価	有能感	達成感
1 能力の活用	.63	.06	.14	.46	-.17	.66	.24*	.18	.29*	.28*
2 達成	.74	-.18	.12	.32	-.14	.71	.25*	.24*	.36**	.35**
3 責任性	.86	-.14	-.09	-.01	-.08	.76	.32**	.21	.39***	.40***
4 他者援助	.38	-.74	-.02	.14	-.07	.72	.20	.19	.36**	.30*
5 社会的貢献	.21	-.76	.06	.31	.07	.72	.15	.19	.23	.14
6 権威	.31	-.23	.12	.74	.04	.71	.11	.05	.14	.24*
7 自律性	.79	.02	.17	.04	-.13	.67	.23	.13	.31**	.33**
8 創造性	.63	-.25	-.02	.21	-.44	.70	.17	.14	.29*	.33**
9 ライフ・スタイル	.71	-.19	.19	.10	-.23	.64	.16	.15	.30*	.28*
10 人間的成長	.67	-.12	.21	.24	-.11	.57	.34**	.29*	.41***	.34**
11 身体的活動	.39	-.51	.12	-.14	-.16	.47	.15	.07	.16	.19
12 社会的評価	.08	.09	.29	.77	-.12	.71	-.09	-.12	-.02	.01
13 危険性	.37	-.23	-.20	.25	-.71	.79	.11	.07	.21	.29*
14 多様性	.47	-.24	-.14	.05	-.76	.87	.19	.12	.29*	.32**
15 人間関係	.22	-.60	.16	.22	-.41	.65	.12	.13	.33**	.21
16 経済的安定性	.18	.05	.66	.22	.12	.53	-.03	-.01	.07	-.11
17 健康	.35	-.31	.74	-.03	-.09	.76	.12	.10	.19	.06
18 ゆとり	.28	-.06	.71	.27	-.17	.68	.06	.07	.14	.07
19 宗教	.09	-.42	-.41	.24	.31	.51	.11	.10	.13	.18
20 老後	-.06	-.51	.50	-.21	.23	.62	.06	.12	.04	-.05
21 学習	.65	-.14	.22	-.06	-.06	.49	.29*	.20	.26*	.25*
22 仕事	.03	-.18	-.16	.71	-.18	.59	-.07	-.08	-.06	.01
23 地域社会	-.05	-.80	-.03	.10	-.31	.75	.05	.03	.10	.12
24 趣味やレジャー	.16	-.02	.30	.08	-.74	.67	.00	-.02	.05	.08
25 家庭生活	.01	-.53	.42	-.20	-.12	.52	.13	.19	.26*	.12
寄与率(%)	20.72	14.36	10.42	10.37	10.07	65.94	*; p<.05, **; p<.01, ***; p<.001			

示しており、自己成長志向という生き方志向性が、生き方や人生への充実感や肯定的評価、有能感や達成感に関係していることが理解される。

大学生女子の結果(表5-2)について見ると、基本的には『社会的関係志向』『創造的変化志向』『自己成長志向』『生活安定志向』の4因子を確認することができるが、「25. 家庭生活」は、『生活安定志向』ではなく『社会的関係志向』により高い負荷を示していることと、第5因子は、寄与率は低いものの「10. 人間的成長」「25. 家庭生活」の2尺度に対して「22. 仕事」が逆の負荷を示すという構成になっている点が特徴的である。また、生き方志向性と生き方受容との関連については、「5. 社会的貢献」が「達成感」と0.1%水準で有意な正の相関を示したほか、「肯定的評価」「有能感」との間にも5%水準で有意な正の相関が認められた。また、生き方受容の「充実感」と有意な正の相関を示した尺度はまったく見られなかったが、生き方受容尺度の複数の下位尺度との間に有意な正の相関を示した尺度には、「15. 人間関係」「23. 地域社会」「25. 家庭生活」があったことから考えると、大学生女子の場合には、社会的関係志向という生き方志

三川：生き方志向性の構造と生き方受容との関係

表5-2 「生き方志向性」の構造と「生き方受容」との関連（大学生女子，n=125）

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h ²	充実感	肯定的評価	有能感	達成感
1 能力の活用	.17	.44	.61	-.02	-.18	.62	-.02	.11	.16	.16
2 達成	.36	.28	.64	-.22	-.13	.68	-.08	.05	.02	.10
3 責任性	.07	-.01	.82	-.11	.08	.70	-.07	-.02	.05	.01
4 他者援助	.86	-.08	.18	-.02	-.08	.78	.11	.16	.14	.22*
5 社会的貢献	.89	-.14	.14	.00	-.19	.87	.15	.19*	.19*	.30***
6 権威	.58	.22	.24	-.38	-.30	.67	.08	.16	.11	.21*
7 自律性	-.03	.28	.74	-.19	.04	.66	.04	.10	.15	.15
8 創造性	.12	.72	.38	-.05	-.14	.69	-.06	.00	.09	.14
9 ライフ・スタイル	.01	.26	.52	.52	.07	.61	-.08	.00	.01	.06
10 人間的成長	-.05	.02	.17	-.08	.50	.29	-.08	-.10	-.13	-.12
11 身体的活動	.42	.44	-.05	-.11	.19	.42	.01	.01	.10	.13
12 社会的評価	.35	.28	.11	-.62	-.28	.67	-.02	.05	-.05	.07
13 危険性	.08	.85	.24	-.02	.01	.78	-.06	-.01	.17	.11
14 多様性	.08	.77	.24	.05	-.19	.69	.01	.06	.20*	.14
15 人間関係	.63	.46	.00	-.26	.04	.67	.14	.17	.19*	.21*
16 経済的安定性	-.09	.09	.02	-.82	-.06	.70	-.15	-.15	-.17	-.15
17 健康	.37	-.06	.18	-.62	.17	.59	-.07	.04	.01	.05
18 ゆとり	.02	.13	.10	-.77	.26	.68	.05	-.00	-.04	.03
19 宗教	.56	.07	.23	-.08	.11	.39	.09	.10	.14	.12
20 老後	.21	-.14	.11	-.62	.12	.48	.04	.01	-.04	.04
21 学習	.20	.25	.70	-.04	.07	.60	-.10	-.01	.08	.13
22 仕事	.09	.16	.35	.07	-.56	.47	-.02	-.03	.03	.12
23 地域社会	.76	.27	-.10	-.07	-.05	.67	.17	.15	.18*	.18*
24 趣味やレジャー	.01	.72	.16	-.16	.14	.58	.09	.08	.14	.14
25 家庭生活	.52	.20	.04	-.17	.45	.55	.15	.18*	.18*	.17
寄与率 (%)	16.55	14.22	13.72	12.39	5.13	62.01				

*; p<.05, ***; p<.001

向性が生き方受容に関連するのではないかと推測される。

社会人男子の結果（表5-3）を検討すると、基本的に『自己成長志向』『生活安定志向』『創造的変化志向』の3因子が認められたほか、「23. 地域社会」「5. 社会的貢献」「19. 宗教」を中心に、これに「22. 仕事」が加わった『社会的活動志向』とも呼ぶべき第4因子と、「22. 仕事」「12. 社会的評価」にやや高い負荷を示す『職業的評価志向』が第5因子として抽出された。また、生き方志向性と生き方受容との関連については、ほとんどの尺度間で有意な正の相関が認められ、生き方志向性と生き方受容とが密接に関連することが示唆されたが、「16. 経済的安定性」「19. 宗教」「22. 仕事」の3尺度は、役割受容尺度の「達成感」を除き、まったく有意な相関を示さなかった。このことから考えると、このような生き方志向性は、人生や生き方における達成感をもたらしても、その充実感や肯定的評価、有能感には関連しないのではないかと考えられる。

社会人女子の結果（表5-4）では、まず『自己成長志向』『創造的変化志向』の2因子が認められた。なお、第3因子は、「18. ゆとり」「17. 健康」「16. 経済的安定性」に「25. 家庭生活」

表5-3 「生き方志向性」の構造と「生き方受容」との関連（社会人男子，n=295）

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h ²	充実感	肯定的評価	有能感	達成感
1 能力の活用	-.83	.14	-.28	.06	-.06	.80	.16**	.30***	.38***	.41***
2 達成	-.83	.18	-.21	.17	-.12	.81	.19***	.34***	.39***	.46***
3 責任性	-.71	.29	-.05	.08	-.03	.60	.15**	.23***	.23***	.30***
4 他者援助	-.60	.21	-.25	.49	.08	.72	.18**	.26***	.31***	.31***
5 社会的貢献	-.52	.07	-.20	.68	.04	.77	.21***	.28***	.30***	.33***
6 権威	-.61	.23	-.13	.18	-.51	.73	.28***	.33***	.36***	.46***
7 自律性	-.76	.29	-.18	.02	-.20	.73	.21***	.28***	.35***	.42***
8 創造性	-.77	.07	-.38	.07	-.15	.77	.17**	.26***	.32***	.39***
9 ライフ・スタイル	-.74	.39	-.18	.18	-.10	.77	.18**	.27***	.36***	.41***
10 人間的成長	-.71	.39	-.29	.07	-.08	.75	.18**	.29***	.34***	.39***
11 身体的活動	-.22	.30	-.68	.21	-.10	.65	.15**	.20***	.26***	.24***
12 社会的評価	-.42	.27	-.33	.03	-.60	.71	.14*	.19***	.23***	.31***
13 危険性	-.51	.05	-.68	.13	-.24	.80	.18**	.25***	.36***	.39***
14 多様性	-.45	.10	-.69	.10	-.19	.73	.16**	.23***	.34***	.35***
15 人間関係	-.49	.28	-.50	.28	-.08	.65	.26***	.35***	.41***	.40***
16 経済的安定性	-.26	.74	-.13	-.03	-.32	.74	-.01	-.01	.08	.13*
17 健康	-.22	.77	-.19	.14	-.13	.71	.03	.11	.15**	.20***
18 ゆとり	-.32	.77	-.23	.02	-.01	.75	.04	.10	.15**	.16**
19 宗教	-.02	-.06	-.03	.67	-.24	.51	.07	.09	.08	.17**
20 老後	-.19	.52	.19	.48	-.16	.60	.11	.14*	.13*	.20***
21 学習	-.69	.20	-.21	.23	-.16	.64	.12*	.27***	.29	.33***
22 仕事	-.13	-.04	-.03	.46	-.68	.70	.07	.06	.09	.25***
23 地域社会	-.09	.25	-.22	.76	-.04	.69	.23***	.24***	.27***	.30***
24 趣味やレジャー	-.21	.47	-.63	.01	.20	.70	.14*	.14*	.22***	.16**
25 家庭生活	-.20	.66	-.22	.15	.20	.59	.16**	.17**	.23***	.21***
寄与率 (%)	27.49	14.59	11.88	10.10	6.41	70.47	*: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001			

および「24. 趣味やレジャー」が加わった『生活安定志向』であると考えられるが、ここに「22. 仕事」が逆の負荷を示している点が特徴的である。また、第4因子は「4. 他者援助」「5. 社会的貢献」と「23. 地域社会」で構成される『社会的援助志向』と解釈できる内容になっているほか、第5因子は「19. 宗教」「20. 老後」の2尺度のみから構成され、『老後・宗教志向』として解釈できる。なお、生き方志向性と生き方受容との関連については、社会人男子の結果とは異なり、有意な相関は比較的少なくなっていた。生き方受容尺度のうち、3つの下位尺度にわたって有意な相関を示した生き方志向性尺度には、「23. 地域社会」「25. 家庭生活」「4. 他者援助」「10. 人間的成長」などの『社会的関係志向』に関する下位尺度が含まれていたのに対して、「7. 自律性」「12. 社会的評価」「16. 経済的安定性」「22. 仕事」はまったく有意な相関を示さなかったことからみて、このような生き方志向性は生き方受容に関連しないことが理解される。

三川：生き方志向性の構造と生き方受容との関係

表 5-4 「生き方志向性」の構造と「生き方受容」との関連（社会人女子，n=138）

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h ²	充実感	肯定的評価	有能感	達成感
1 能力の活用	.79	-.31	-.13	-.08	-.06	.75	.11	.08	.23**	.27**
2 達成	.75	-.41	-.17	-.20	-.02	.80	.06	.08	.23**	.26**
3 責任性	.76	-.15	-.18	-.21	-.12	.69	.06	-.02	.10	.21*
4 他者援助	.43	-.22	-.15	-.77	-.02	.85	.13	.18*	.25**	.31***
5 社会的貢献	.36	-.20	-.06	-.75	.26	.80	.11	.15	.20*	.23**
6 権威	.33	-.59	-.02	-.31	.18	.58	.07	.03	.13	.24**
7 自律性	.69	-.25	.02	-.24	.03	.59	-.02	-.11	.09	.11
8 創造性	.64	-.54	-.04	-.04	-.03	.70	.12	.07	.19*	.27**
9 ライフ・スタイル	.74	-.31	-.27	-.08	.08	.73	.06	.07	.24**	.23**
10 人間的成長	.71	-.16	-.40	-.10	-.09	.71	.18*	.12	.24**	.26**
11 身体的活動	.13	-.68	-.25	-.38	.05	.68	.16	.08	.19*	.29***
12 社会的評価	.33	-.74	-.12	-.13	.16	.71	.00	-.06	.07	.13
13 危険性	.34	-.85	-.02	-.10	-.04	.84	.06	.04	.18*	.23**
14 多様性	.40	-.76	-.02	-.05	-.07	.75	-.00	-.07	.09	.16
15 人間関係	.44	-.58	-.24	-.37	-.08	.72	.07	.03	.17*	.25**
16 経済的安定性	.36	-.19	-.73	.15	.24	.78	.02	.05	.11	.08
17 健康	.27	-.18	-.79	-.13	.11	.75	-.04	-.02	.08	.11
18 ゆとり	.35	.00	-.80	-.07	.05	.76	-.05	-.01	.07	.06
19 宗教	-.19	-.06	.16	-.15	.75	.64	-.05	-.01	.01	-.06
20 老後	.10	.07	-.39	-.08	.74	.72	.06	.10	.13	.05
21 学習	.72	-.25	-.22	-.07	.12	.65	.09	.05	.18*	.23**
22 仕事	.19	-.37	.47	-.23	.32	.54	.02	-.04	-.01	.08
23 地域社会	-.06	-.41	-.13	-.61	.38	.71	.21**	.23**	.29***	.35***
24 趣味やレジャー	.27	-.52	-.55	-.10	-.04	.66	.04	-.04	.13	.13
25 家庭生活	-.03	-.08	-.67	-.33	-.08	.58	.16	.26**	.30***	.29***
寄与率 (%)	22.90	18.18	13.87	9.40	6.50	70.85	*: p<.01, **: p<.01, ***: p<.001			

4 結論と今後の課題

以上の結果からみると、生き方志向性には、基本的に『自己成長志向』『社会的関係志向』『創造的変化志向』『生活安定志向』『職業的評価志向』の5つの側面があることが示されたが、その構造は大学生と社会人とで、さらには男性と女性との間でやや異なる構造を持つことが示唆された。また、生き方志向性と生き方受容との関連については、社会人男子においてのみ密接な関連があることが顕著に示されたが、それ以外の群においては、その関連は必ずしも明確ではなかった。このことから、将来の人生においてどのような生き方をしたいかという生き方志向性は、社会人男子においては、生き方や人生に対する充実感や肯定的評価、有能感や達成感に影響すると考えられるが、女子の場合には、そのような関係を見出すことはできなかった。しかしながら、社会人においては、男女ともに「仕事」や「経済的安定性」に関する生き方志向性が生き方受容

には関連しないことが示され、これとは逆に、「地域社会」や「家庭生活」、「他者援助」や「社会的貢献」などの社会的関係や対人援助に関係する生き方志向性は、生き方受容と関連することが示された。このことから推論すれば、他者への関心の拡大や対人援助に関する生き方志向性が生き方受容に影響すると考えられるばかりではなく、これらの結果は、「生きがい」とは「働きがい」や「仕事のしがい」だけではなく、さらに多くの要素から構成されるものと考えねばならないという、冒頭に提起した視点を改めて確認するための根拠となるものと思われる。

なお、本研究の主な検討課題は、人生目標として機能し、個人の生き方に方向性を与える「生き方志向性」の構造と「生き方受容」の関連を検討することであったが、最も重要なことは、「生きがい」の問題を、仕事や家庭といった限られた生活領域に限定してとらえるのではなく、さまざまな役割が相互に関連する「生き方」全体の中で検討することであった。その意味では、これまでの研究のように、「生きがい」を一つの結果とし、それをもたらした規定要因を明らかにしていくという“還元主義的なアプローチ”から脱却して、各生活領域が相互に関連し合う生活構造、すなわち「生き方」そのものを全体的にとらえ直すという“全体論的なアプローチ”が必要とされていることを、常に銘記しておかねばならないのである。

付 記

- (1) 本研究の「問題と目的」は、日本行動計量学会第29回大会(2001年9月; 甲子園大学)において、「ライフパタン研究の方法論的展開」(特別セッション)における「ライフパタン・モデル構築の基礎—これまでの臨床発達心理学的研究の経緯—」(発表論文抄録集, pp. 246-249.)と題して発表した内容に加筆・修正したものである。
- (2) 本研究の調査結果の一部は、日本人間性心理学会第17回大会(1998年9月; 追手門学院大学)において、「生き方志向性の検討—生き方受容との関連から」(発表論文集, pp. 76-77.)と題して発表した。
- (3) 本研究で用いた社会人データは、(財)国際経済労働研究所によって行われる第37回共同意識調査(ONIONⅢ調査)に向けての予備調査データである。このデータの使用については、(財)国際経済労働研究所の了解を得た。

文 献

- Gould, R. L. 1978 *Transformations*. Simon and Schuster.
- 小林 司(編) 1993 カウンセリング事典 新曜社
- Levinson, D. J., Darrow, C. N., Klein, E. B., Levinson, M. L. & McKee, B. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. Knopf. 南博訳 1980 人生の四季 講談社
- 三川俊樹 1988 成人期における役割受容 追手門学院大学文学部紀要, 22, 1-22.
- 三川俊樹 1990 ライフ・キャリアの視点からみた役割受容 進路指導研究, 11, 10-17.
- 三川俊樹 1991 成人期の危機と自己変容 進路指導研究, 12, 54-61.
- 三川俊樹 1996 中年期の危機と安定—自我とキャリアの推移から 関崎一(編) 青年期からの自己実現 ナカニシヤ出版, Pp. 122-136.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1993 新価値観尺度の開発 追手門学院大学文学部紀要, 28, 35-48.
- 中西信男・三川俊樹 1988 職業(労働)価値観の国際比較に関する研究—日本の成人における職業

(労働) 価値観を中心に 進路指導研究, 9, 10-18.

Sheehy, G. 1976 *Passages: Predictable Crisis of Adult Life*. Dutton. 深沢道子訳 1978 パッセージ I・II プレジデント社

Super, D. E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.

2002年5月7日 受理

付表1 生き方志向性尺度

能力の活用	身体的活動	学習
1. 自分の能力を活かす	11. 運動やスポーツをする	21. さまざまなことを学習する
26. 自分のもつ知識や技術を活用する	36. 身体を使って活動する	46. 幅広い教養を身につける
51. 自分の能力を高める	61. 体力の必要な活動をする	71. 自分を豊かにするために学ぶ
達成	社会的評価	仕事
2. 価値のあることをなすとげる	12. 他の人々から認められる	22. 仕事を生きがいにする
27. 自分の目標を達成する	37. 重要な人物として認められる	47. 仕事を生活の中心にする
52. 将来の目標に向けて努力する	62. 他の人々から高く評価される	72. 何よりも仕事を優先する
責任性	危険性	地域社会
3. 自分に責任をもつ	13. 新しいことに挑戦する	23. 近所づきあいを大切にする
28. 自分のことは自分でする	38. 冒険的なことをやってみる	48. 地域社会の活動や行事に参加する
53. 自分の考えで決定する	63. 時には危険を冒してみる	73. 近隣の人々と共同して活動する
他者援助	多様性	趣味やレジャー
4. 他の人々を援助する	14. さまざまなことを経験してみる	24. 趣味やレジャーを楽しむ
29. 困っている人々を助ける	39. 変化のある暮らしをする	49. 趣味やレジャーの時間を多くとる
54. 他の人々に親切にする	64. 一つの型にはまらない人生を送る	74. 自分の趣味を活かした活動をする
社会的貢献	人間関係	家庭生活
5. 社会のために貢献する	15. さまざまな人々とつきあう	25. 家族とのつながりを大切にする
30. 他の人々のために奉仕する	40. 他の人々と一緒に活動する	50. 家族と一緒に過ごす時間を多くとる
55. 世の中の平和や幸福のために尽くす	65. 人づきあいを大切にする	75. 何よりも家庭生活を大切にする
権威	経済的安定性	
6. 他の人々を指導する立場に立つ	16. 安定した収入を得る	
31. 他の人々から信頼される	41. 経済的に豊かな暮らしをする	
56. リーダーシップを発揮する	66. 生活に十分な経済力をもつ	
自律性	健康	
7. 自分の意見を主張する	17. 健康管理に気をつける	
32. 自分の信念に従って生きる	42. 身体を大切にいたわる	
57. 自分の力で問題を解決する	67. 規則正しい生活をする	
創造性	ゆとり	
8. 新しいことを創造する	18. ゆとりのある生活をする	
33. 新しい工夫や発見をする	43. 心のゆとりをもつ	
58. 新しいアイデアや方法を試してみる	68. 安らぎや落ち着きのある生活をする	
ライフ・スタイル	宗教	
9. はっきりとした人生の目標をもつ	19. 信仰をもつ	
34. 自分なりの生き方を大切にする	44. 宗教的な支えをもつ	
59. 見通しのある将来計画を立てる	69. 宗教的な活動に参加する	
人間的成長	老後	
10. 人間として成長する	20. 老後のために準備をする	
35. 自分の心を豊かにする	45. 老後の生活設計を立てる	
60. 自分の満足できる人生を送る	70. 老後の生活のために貯蓄する	

付表2 生き方受容尺度

充実感

- 1. 私は、自分の生き方に満足している
- 5. 私は、自分の個性を活かした生き方をしていると思う
- *9. 私は、今の自分の生き方にももの足りなさを感じている
- *13. 私は、自分の生き方に不満を感じる事が多い
- 17. 私は、充実した人生を送っていると思う
- 21. 私は、これから先も今のような人生を送っていききたいと思う
- 25. 私は、幸福な人生を歩んでいると思う
- *29. 私は、このままの生き方で人生を終わりにたくないと思う
- 33. 私は、自分らしい生き方をしていると思う
- 37. 私は、自分の人生に生きがいを感じている

肯定的評価

- 2. 私は、自分の生き方が気に入っている
- 6. 私は、自分の生き方に誇りをもっている
- *10. 私は、どんな生き方をすればいいのか、よくわからない
- *14. 私は、つまらない人生を送っていると思う
- *18. 私は、今の自分の生き方が、何かまちがっているような気がする
- *22. 私は、自分の人生において、やりたくないことばかりさせられているように思う
- *26. 私は、自分の人生において、多くの時間をムダにしているように思う
- 30. 私は、世間から見れば、成功した人生を送っていると思う
- *34. 私は、自分の将来の生き方など、どうでもよいことだと思う
- *38. 私は、自分の生き方に、ふと疑問を感じる事があ

有能感

- 3. 私は、自分の理想とする生き方をしていると思う
- 7. 私は、自分の人生を楽しんでいる
- 11. 私は、これから先の人生を楽しみにしている
- 15. 私は、たとえ困難なことがあっても、何とかうまく生きていけるだろうと思う
- *19. 私は、どう生きていったらいいのか、困ってしまうことがある
- *23. 私は、これまでの自分の生き方を後悔している
- *27. 私は、これから先の人生において、失敗するのではないかと不安になる
- *31. 私は、自分の生き方に自信がもてなくなることがある
- 35. 私は、これから先の人生が、もっとよくなるだろうと期待している
- 39. 私は、自分の人生の目標を達成する自信がある

達成感

- 4. 私は、自分の人生をすばらしいものにする自信がある
- 8. 私は、自分の人生において与えられたことを、積極的にこなしていける
- 12. 私は、自分の思い通りの生き方をしていると思う
- 16. 私は、こうありたいという人生の目的をはっきりもっている
- 20. 私は、自分の人生において、かなりのことを達成してきたと思う
- 24. 私は、これから先の人生においても、かなりのことを成し遂げる自信がある
- 28. 私は、これまでの人生において、さまざまな困難を乗り越えてきたと思う
- *32. 私は、これまでの人生において、後悔することが多かったと思う
- *36. 私は、本当は今までの人生とは違う生き方をしたかったと思う
- *40. 私は、これから先の人生が、今よりもよくなることはないだろうと思う

*は、逆転項目